

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2025年5月25日号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第9回仙台国際音楽コンクール【開催日程】ヴァイオリン部門 2025.5.24 (土)～6.8 (日) ピアノ部門 2025.6.14 (土)～2025.6.29 (日)

第9回仙台国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門レポート

予選 1 日目 2025 年 5 月 24 日 (土)

音楽ジャーナリスト：正木 裕美

第9回ヴァイオリン部門では、出場申込 193 名のうち 41 名が予選に進み（うち 4 名辞退）、初日は 13 名が出場した。課題曲はイザイの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第5番とオーケストラ（指揮者なし）を伴うモーツァルトのアダージョ K261、ロンド K373。直近の過去2回で課されていたJ.S. バッハのヴァイオリン協奏曲からの変更は、今回の課題曲における最大の特色と言えるだろう。これにより出場者はすべてのラウンドでモーツァルトを演奏することになり、様式感や構築力、音楽性を異なる編成の中で示すべく、より一層柔軟なアンサンブルを求められることになった。なお管弦楽は室内楽編成の仙台フィルハーモニー管弦楽団(2チーム)、山形交響楽団が交代で務めた。

イザイのソナタにおける初日の傾向としては、勢いや力強さで技巧面にフォーカス（もしくはカバー）する者、俯瞰的に音楽を構築し、音色や旋律の弾き分けまで至る者と、奏者の力量が露わになった。またモーツァルトでは、特にロンドでオーケストラとの微妙なずれが生じる場面が散見された。これには勢い任せの速いパッセージ、あるいは音価をおざなりにした過度な推進力、などの理由が挙げられ、改めてモーツァルトにおけるアンサンブルの難しさも露呈した。

その中で、韓国出身のキム・ハラムはいずれもバランスが良く、イザイは無駄のない運指や運弓で、技巧や音域に左右されることがない。モーツァルトではフレーズを端正に歌い込み、ロンドではオーケストラとの伸縮性に富んだ闊達なアンサンブルが見られた。ただ1点、強拍で足を踏み鳴らす行為は、好悪が分かれるかもしれない。

イザイではパク・ソヒョン（韓国）が抜きんてた構築力を発揮した。堅固な組み立てが楽想の変化を浮き彫りにし、その上第1楽章では微細なテンポの揺れによる「自由な拍」も併せ持っていた。また第2楽章テーマの再現部以降の精彩な山場は、練り上げられた構成ゆえだろう。

チン・イエヨン・ジェニー（韓国）もイザイで確かな構成力を見せたが、特筆すべきはモーツァルトだろう。アダージョにおける優美なレガートによる品位と伸びやかさ、ロンドにおける密な対話が生み出す主旋律と内声部の弾き分けは、自然で作為性がなく、静謐さを讃えたモーツァルトであった。

ロン＝ティボー国際コンクール他で入賞歴のあるヴィクラム・フランチェスコ・セドーナ（イタリア）は余裕も漂う演奏で、イザイでは作品を俯瞰し、極めて流麗。第2楽章のテンポはゆったりとして、リズムの強調よりも色彩の移ろいに意識を向けているようだった。モーツァルトでは一音一音を切って発音する場面もみられ、ヴィブラートはかけるものの、ピリオド奏法の要素も。今年から審査には古楽界をリードする寺神戸亮も加わっており、その評価も気になるところだ。

このほか、パク・ウォンミン（韓国）の艶やかで濃密な音色と凄烈なテクニックも強い印象を残したが、音が鳴ってしまうゆえに翳りを帯びず、全体的にロマンティックで濃厚な色合いが強かった。ただ、彼女を含めて韓国からの出場者の多くは発音が的確で、音域の差も音量や音色にほぼ影響しない。時代の趨勢とは言え、総合的に高いレベルを印象づけた。



■お問い合わせ／公益財団法人 仙台市市民文化事業団 仙台国際音楽コンクール事務局
〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5 Tel:022-727-1872 Fax:022-727-1873 Email:info@simc.jp URL:https://simc.jp

サミール・アグラワル（アメリカ）のイザイは情感の繊細な表出（第 1 楽章）やテクニックを駆使した鮮やかさ（第 2 楽章）を持ち合わせ、推進力よりもテンポの振幅を大きく取って自己表現に徹した。その分、ややエキセントリックだったか。モーツァルトのアダージョではトップバッターの重圧を跳ね除け、クリアな音質で調和を見せたが、反面ロンドではテンポの軸がブレてしまい、オーケストラとの齟齬が生じた。

エリック・チェン（アメリカ／台湾）はイザイで音程が微妙に定まらず、技術面でもう一歩的確であれば良かった。モーツァルトのアダージョは音間を埋める豊かな抒情性と柔軟性が一際光った。オーケストラとも美しく調和したが、個人的にはロンドの細かい動きを丁寧に追って欲しかった。

落合真子（日本）は力強い「曙光」（第 1 楽章）を聴かせ、第 2 楽章もよく弾き込んでおり堂々たる演奏ぶりを見せた。モーツァルトではお手本のようにアーティキュレーションを的確に施し、アンサンブルも安定していた。一方で、イザイもモーツァルトも音色に均一な印象を持った。

ユリアン・ヴァルター（オーストリア）のイザイは澄んだ音色でのびやか。技術面には余裕があるように聴こえたが、第 2 楽章終結部では音程の精度よりもデュナーミクが優先されてしまった。モーツァルトはアウフタクト（弱起）、フレーズの始まりや終わりを丁寧に扱い、曲想を表情豊かに歌い上げて、アンサンブルとの阿吽の呼吸に繋がった。それだけに、転調を伴うカデンツァの終止が、合奏へスムーズに繋がらなかったことが残念。

ツァオ・ジャーチェン（中国）は、イザイで悠然とした流れの中に瞬発力を発揮する一方、時折小節単位で推進力が途絶えるのがやや気になった。モーツァルトではオーケストラとの呼吸を合わせて繊細なアンサンブルを奏で、協奏への意識が一際高い。トゥッティになると自身の指揮で音楽の表情づけを行い、作品全体への音楽観を示した。

ザカリー・ブランドン（アメリカ）はイザイで音楽を俯瞰し、装飾的音型や流れの中で聴かせるべき旋律を丁寧に追っていた。一方、ピツィカートでうまく芯を捉えられない場面があり、後半のテーマ再現部以降で一部重音を敢えて弾かなかった。モーツァルトでは豊かな音色を湛え、爽やかにオーケストラと疾走したが、ロンドで一瞬のずれが生じ、オーケストラのフォローを得た。

イ・ジユン（韓国）はイザイで途中譜面を忘れてしまい、またロンドでは容易（たやす）いはずの上行音型で音を外したりと、全体的に粗が目立った。ロンドではとにかく弾ききる体になってしまったのが残念。イザイの闊達なリズム、アダージョの艶やかな音色など、美点もあった。

キム・ヒョンジ（韓国）は弓を大きく使い、シャープな音色でイザイを奏でた。アダージョにおける憂いを湛えた音色は彼女ならではの持ち味だろう。寄せては引いて、緩急豊かな情感を表現し、美しい旋律を響かせた。ロンドでは休符を含む特定の音型で急ぐ傾向にあり、一部でアンサンブルとの一体感に欠けた。